おゆみ野にみる縄文時代の終焉

古内　茂

1　はじめに

三方を海で囲まれた房総半島は、狩猟・採集の時代において海という自然の恩恵に依拠し大規模な集落や貝塚を形成してきた。とりわけ東京湾に面した地域では、その傾向が強く窺われる。著名な加曽利貝塚・荒屋敷貝塚といった大規模遺跡の形成は、その好例といえよう。しかし、縄文時代も終わりに近づく頃になると状況は一変する。この頃になると、遺跡の規模は縮小し貝塚の形成も限られたものとなる。成田市荒海貝塚や横芝光町山武姥山貝塚が代表的な遺跡として知られているが、貝塚の形成は十指にも満たない程度のものとなる。この減退傾向は後期の貝塚と比較すると一目瞭然である。本稿では、この衰退期ともいえる縄文晩期、とりわけその終末期に焦点をあて、「おゆみ野」という限定された狭小の地ではあるが、調査の成果を通して貝塚文化の終焉について考えてみたい。

2　縄文時代の推移

おゆみ野地区は約600ヘクタールの開発に先行するかたちで昭和49年度から調査が開始された。結果的には40か所を越える遺跡を調査することとなった。この地域は、北に都川から続く支谷が入り込み、東南は村田川水系に連なり、平坦な台地を形成するとともに各時代の遺跡が残されてきた。そこで、この地を縄文人の活動範囲の場として捉えた場合、決して狭いものであったとはいえまい。縄文時代における一生活圏と仮定してもあながち間違いとはならないであろう。調査の結果からみても遺構・遺物の分布は、濃淡はあるにせよ早期から晩期に至るまでたゆまなく継続している地であったことが判明した。

特に早期後半では、条痕文系土器群を伴う炉穴群が多数の遺跡で検出[1]されており注目できる。炉穴は単独で存在することは少なく、数基が重複していることが多い。こうした検出例から推察すると、各所で集落を形成していたことは容易に想像できるが、住居址を伴うという点では太田法師遺跡以外は見あたらない。また、この時期に形成された貝塚は周辺域も含めて大きなものは認められないが、想像以上に人びとが居住していた可能性を指摘できる。

反面、前期は遺跡数として多くはないが、大膳野南貝塚・同北遺跡、バクチ穴遺跡などで後半期の土器群が出土し、太田法師遺跡では浅鉢を伴う土坑墓群も検出されている。つまり開発区の南東部一帯、村田川の支流によって開析された谷奥部一帯が前期後半の主要な居住地となっていたようである。大膳野南貝塚では確認調査ということもあり、詳細は把握できていないが、この時期に貝塚が形成されている可能性もある。

確実に大規模貝塚を伴う遺跡が形成されるのは中期となる。有吉北・南の両貝塚は隣接して位置し、ほぼ全面が調査された北貝塚は検出遺構数からこの地域の拠点的な集落と見做される。おそらく南貝塚もそれに匹敵するものと思われる。他に小規模な集落は各所で確認されているが、住居址内で検出される小規模な貝ブロックを除いて貝塚を伴うことはない。こうした事例をみても有吉北・南の両貝塚が中期における集落の中心的な位置を占めていたことは明らかであろう。

さらに後期についてみると、小金沢貝塚・木戸作貝塚・上赤塚貝塚といった貝塚を伴う３遺跡が調査されている。小金沢・木戸作の両貝塚は近接して立地しており、両者から支谷を挟み約１,５km離れた北西に上赤塚貝塚が位置し、現在は公園として保存されている。貝塚の形成という点に立脚して土器群を観察すると、この時期での最盛期は堀之内Ｉ式期となる。いずれの貝塚でも共通して出土土器の主体を占めている。だが集落構成という点を重視すると、ほぼ全面を調査した木戸作・小金沢の両貝塚での住居址検出数は、木戸作貝塚で計10軒の住居址と炉址１基、一方の小金沢貝塚では住居址が17軒の検出にとどまる。貝塚の形成という点を考慮すると、前述した中期の集落と比較した場合、決して多いとはいえない。また、この時期の住居

第1図　縄文晩期後半の遺跡

址は概して掘込みが浅いため、あるいは後世の耕作等によって失われている場合も想定できよう。

このように縄文時代が推移していくなかで晩期の遺跡についてみると、土器群を比較的多く出土した六通貝塚を取り上げることができる。土器群の構成では、その主体は後期の加曽利B式～安行期（後期後半）にあり、晩期主体の遺跡とはいえないが、本地区においては最大の遺跡となろう。調査は遺跡の一部で、貝層の形成や集落の構成という点では具体的に確認できるまでには至っていないが、晩期においても中心的な位置を占めていたことは確実である。このような状況を考えると、おゆみ野地区の人びとは晩期の到来とともに海への依存度は次第に薄れていったことが理解できる。さらに、その後半期を構成する遺跡は減少し、出土する土器量も僅かなものとなる。

3　晩期後半の様相

そこで、安行式期の一部を含めた晩期後半の土器群が出土している遺跡についてみると、六通貝塚を中心とし高沢遺跡やバクチ穴遺跡など10か所の遺跡が調査されている（第1図）。ここでは、それらのうち主要な遺跡についてもう少し具体的に触れておきたい。

六通貝塚　中期末葉から晩期を経て、一部に弥生時代初期の存在が認められた遺跡である。土器の出土量から、その盛期は後期後半に求められよう。ここでの晩期後半の土器群は、量的に多いとはいえないものの各調査区で出土している。報告（西野2007）でも触れているように貝塚中央部で検出された住居址群（SI009・010・012）やピットなどの遺構から当該期の土器群が認められる。とりわけSI010号（L12-00区）出土の土器群は弥生期に属しており、小集団ながらも集落は存続していたようである。また付近では抉入石斧の欠損品が出土（L11-30区・第4図2）しており、弥生中期の痕跡も確認されている。しかし遺構・遺物については激減しており、晩期前半をもって本遺跡は急激に縮小の一途を辿ったものとみてよいであろう。

高沢遺跡　古墳時代以降の集落が検出された遺跡であるが、住居址の覆土中から多数の晩期後半に属する土器群が出土している。特に015号と101号住居址では20点以上の土器片が出土しており、いわゆる包含層が形成されていた。土器群の大半は荒海式に位置付けられるものであり、粗製の深鉢では種々の条痕が施されて

第２図　縄文晩期終末～弥生中期初頭の遺跡

いる。また、一部の土器には弥生期の特徴を見出せるという。報告（渡邉1990）では、土器群の分布から３地点での居住を予想し、土器の器種・文様から時間差を認めている。こうした事例から包含層の存在は小規模なものといえようが、晩期終末の一時期に居住地として利用されていたことは間違いあるまい。たとえ遺構が存在したとしても、これまでの調査例が示すようにこの時期の遺構が発見されることは少ない。さらに、古墳時代以降の活発な土地活用の結果、遺構は消滅し調査では把握できなくなったものと思われる。

バクチ穴遺跡　遺跡の主体は奈良・平安時代の遺構や遺物で構成されているが、周辺では縄文前期の遺構・遺物が豊富に検出されている。また、晩期後半から弥生初期にかけての土器群も出土しており注目できる遺跡に数えられる。しかし、当該期の遺構は検出されていない。出土土器は形式的にみれば千網・荒海式となろうが、弥生時代に含められる土器群も認められ、撚糸文や条痕文が施文された粗製の深鉢や甕といった器種の破片も存在する。特に弥生期では東海地方や東北南部に分布圏をもつ土器群との関連が指摘（西野2004）されている。こうした土器群の出土は短期間ではあるにせよ、当該期の人びとの痕跡を裏付けるものであり興味深い事実を提供したものといえよう。

有吉北貝塚　晩期前半の遺物は認められていないが、後半から弥生初期の土器群が若干ながら出土している。報告（小笠原1998）では36点の出土とあり、時期的にも高沢遺跡やバクチ穴遺跡などでの出土土器群と共通するところがある。

ここでは上記の４遺跡を取り上げてみたが、これらの遺跡では晩期後半の土器群とともに次の段階にあたる弥生初期に位置付けられる土器群が出土している事実に注目しておきたい（第２図）。その他に後半の土器群を僅かながら出土し縄文時代の幕を閉じる遺跡も数か所が認められた[2)]。いずれの遺跡も晩期後半の千網・荒海式の土器片が僅かに出土するのみで活動の痕跡を示しているに過ぎない。しかし、このような事実も見逃してはならないものと考えられる。こうした中にあって晩期終末の遺跡について整理してみると、当時の人びとの生活では以下のような状況が想定できる。

出土土器の少なさは、滞留が短期間であったことを示すものであり、当時の人びとは各所を転々と移動し

第３図　弥生時代中期の遺跡

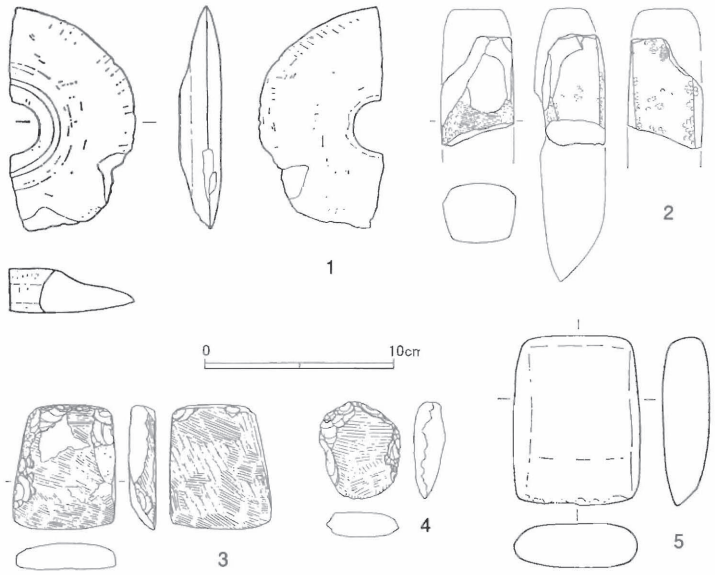
ていたものと解釈できよう。その中でも六通貝塚・高沢遺跡・バクチ穴遺跡ではある程度の土器量と次代の萌芽を窺わせる痕跡を残しており、小規模ながらも住居址等の遺構の存在を推測できる状況を呈している。また、この時期での遺構検出の困難さは竪穴住居址を構築する際の掘込みに起因しているものと考えられる。その一方で、古墳時代以降の集落の拡大と畑地の開墾等によることも見逃せない。

さらに貝塚の消滅について考えると、気候の温暖化による海進現象により沿岸部での魚介類獲得の領域がが狭められられたことも一つの要因となろう。この点、晩期の貝塚形成遺跡をみると「縄文早期や前期と同じように、再び東京湾の旧海汀に直接面した台地上を選んで占地するものが多く‥‥」（後藤1974）とあるように東京湾沿いでも海進の影響を否定することはできない。こうした自然現象は、それまでの狩猟・採集生活のバランスを崩していったものと考えられる。荒海川表遺跡の報告（山田2001）でも触れているように、この時期の遺跡ではシカやイノシシといった大型哺乳類の遺存体が多くなり、魚類骨の減少や貝類に変化がみられるという。このような調査の所見から推測すると、晩期の狩猟・採集活動は大型哺乳類を中心としたもので結果的に狩猟活動領域圏からそれらの哺乳類を激減させていったものとも考えられる。そのため食糧の獲得は十分なものとなり得ず、遺跡数の減少や集落の縮小化へと向かうようになったものと推測することができよう。

４　弥生時代への推移

前述したように、弥生時代の到来を告げる痕跡は晩期後半の土器群とともに出土する場合が少なくない。それらの遺物が発見される遺跡に限って、その量は僅少で長期間にわたる集落の展開をみることはない。いわば縄文時代の延長として捉えられよう。そこで、おゆみ野での調査例をみると、前述した遺跡の他に、次の段階に位置付けられる須和田式土器を出土した遺跡として椎名崎遺跡（上村1979）と有吉遺跡４次（山田1999）の２例をあげることができる。有吉遺跡４次では１軒ではあるが住居址が検出されている。こうした事例をみると、この一帯が無人化することはなく、少人数ではあるが活動の場に供されていたことになろう。

その後、中期も宮ノ台式期に入ると、その痕跡は微



第４図　弥生時代出土石器（１有吉遺跡、２六通貝塚、３・４神明社裏遺跡、５椎名崎遺跡）

増する傾向にある。椎名神社遺跡（西野2003）と城ノ台遺跡（関口2006）で当該期の住居址が１軒ずつ検出されている（第３図）。この時期に伴うと考えられる石器（第４図）も単独ながら六通貝塚で抉入石斧、椎名崎遺跡や神明社裏遺跡（山田2008）では扁平片刃石斧、有吉遺跡（種田・阪田1975）で環状石斧の出土が認められている。しかし、これらの遺跡では一時的な痕跡を残すといった程度のものであり、農耕を基盤とする集落の形成といった点に発展するまでには至らなかった。こうした観点から周辺域をみると、椎名神社遺跡（蜂屋2003）の報告でも触れているように本地区を流路とする浜野川の河川改修に伴う調査（金丸1989）においても宮ノ台式土器が出土している。流失によるものか、沖積地に居住した人びとの痕跡かはともかく小規模な集落の存在は予想されるところではあるが、現在のところ大きな集落の確認はされていない。その反面、浜野川の南に隣接して流れる村田川の下流域では菊間遺跡や大厩遺跡など環濠を伴う集落が展開しており、広い沖積地の有無が稲作農耕の成立に大きく関与していたものと思われる。

５　結語

これまで、おゆみ野で調査された遺跡の中で縄文時代晩期後半から終末期の遺構・遺物を出土した遺跡を抽出してその内容を述べてきた。そこには一般的に指摘[3]されているように遺跡数が激減する傾向が認められる。これは文化圏の縮小と人口減を意味するものであり、いわば縄文時代の終焉が縮図として描かれているといっても過言ではなかろう。一方、この時期おおいに文化圏を拡大してきた大洞系土器群の出土も認められ、その影響は本地域にも着実に浸透していたものとみられる。

また、この時期に限っては確実な遺構の検出例も少なく、六通貝塚でも僅かな住居址やピットが検出できたのみである。こうした事実を眼前にすると、古くからいわれているように縄文後期以後にあったとされる海進と関連づけて考えることが妥当[4]のように思われる。その根拠として、竪穴住居址の掘込みは中期のものと比較し確実に浅くなっている。掘込みの深浅の相違は当時の気候と環境に起因するものと考えられる。温暖な気候の中では竪穴を深く掘り下げる必要はなかったものと理解できる。このような想定のもとで考えると、後期後半から晩期終末前後が温暖な気候のピーク時であったと推測できる。この気候変動により海岸汀線は陸に迫り、食糧を海に求めた狩猟・採集の生活は次第に圧迫を余儀なくされ、それまでの集落のあり方まで変えていったようである。つまり、食糧確保に基づく一定程度の集団生活を維持できなくなり、やがては小規模集団で領域内を移動していくような生活へと変化していったとみることができよう。

反面、掘込みが深い住居址に暮らしていた縄文時代中期の人びとは、その冷涼な気候の恩恵を受けていたともいえよう。海岸線が後退し、広がった浜辺では貝類の採集は容易となり、拠点的な集落を形成する背景を垣間見ることができる。これはまさしく海の恩恵ともいえよう。その後、中期後半から後期前半にかけて

文化圏の拡大へと発展することは周知のとおりである。その好例が有吉北・南貝塚や後期初頭の大規模貝塚群の形成へと導くものといえよう。

また、弥生中期後半以降にもこれに類似した現象が認められる。環濠集落内での中心的な住居址では深い掘込みをしばしばみることができる。周辺に存在する住居址でもローム層を掘り窪め住居を構築している。このような変化も気候の変動と関連づけて解釈すれば、後退した海岸線により水田稲作を可能とする広い沖積地の形成が大きく寄与したものいえよう。それは「おゆみ野」を流れていた小河川（浜野川）の流域ではなく、比較的規模の大きな村田川や養老川の下流域に求めたものであろう。ここに、おゆみ野一帯が稲作農耕を大きく展開できなかった要因が存在しているものと考えられる。

こうした時代の推移と様々な状況を考えると、古代人がいかに自然との調和を保ちつつ生活してきたのか、当時の遺構・遺物をとおして語りかけているのではなかろうか。

註

1）調査された39遺跡中24遺跡で報告されており、この時期には予想外に多数の人びとが生活していたものと考えられる。だが、エリア内には明確な形で貝塚は残されていない。このことは海以外で主要な生活の糧を得ていたとも考えられる。これは早期の象徴ともいえる急激な海進により浅瀬の沿岸部が縮小し貝類の採集がしにくくなったとも推測できるが、他の東京湾沿いでは早期の貝塚は認められており、残された課題の一つともいえよう。

2）第１図に図示したが、椎名崎古墳群B支群・ムコアラク遺跡・六通神社南遺跡・大膳野北遺跡での出土は僅少で10点にも満たない出土量である。

3）県内の縄文時代を取り扱った『房総考古学ライブラリー－縄文時代（１）－』（三浦1985）でも、晩期後半以降の遺跡は県下で44遺跡しか確認されておらず、遺跡数としては激減している。

4）筆者は、この時期の海進について稲作との関連で触れてきた（古内2008）が、この現象は古くから取り上げられており（山内1968）、房総においても当該期の海進は当時の生活環境に影響を与えたものと考えられる。

文献

山内清男　1968「縄文土器の改定年代と海進の時期について」『古代』第48号　早稲田大学考古学会

後藤和民　1974『千葉市史』第１巻　原始古代中世編　千葉市

種田斉吾・阪田正一　1975『千葉東南部ニュータウン３』－有吉遺跡（第１次）－　（財）千葉県都市公社

上村淳一　1979『千葉東南部ニュータウン６』－椎名崎遺跡－　（財）千葉県文化財センター

三浦和信ほか　1985『房総考古学ライブラリー』縄文時代（１）（財）千葉県文化財センター

金丸　誠　1988『千葉市浜野川遺跡群』（低湿地における遺跡確認調査）　（財）千葉県文化財センター

渡邉修一　1990『千葉東南部ニュータウン17』－高沢遺跡－（財）千葉県文化財センター

小笠原永隆　1998『千葉東南部ニュータウン19』－千葉市有吉北貝塚－　（財）千葉県文化財センター

山田貴久　1999『千葉東南部ニュータウン21』－有吉遺跡（第４次）－（財）千葉県文化財センター

山田敏史　2001「動物遺存体からみた荒海川表遺跡」『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』　千葉県

西野雅人　2003『千葉東南部ニュータウン26』－千葉市椎名神社遺跡－　（財）千葉県文化財センター

蜂屋孝之　2003『千葉東南部ニュータウン26』－千葉市椎名神社遺跡－　（財）千葉県文化財センター

西野雅人　2004『千葉東南部ニュータウン29』－千葉市バクチ穴遺跡・大膳野南貝塚・有吉城跡２－　（財）千葉県文化財センター

関口達彦　2006『千葉東南部ニュータウン34』－千葉市城ノ台遺跡－　（財）千葉県教育振興財団

西野雅人　2007『千葉東南部ニュータウン37』－千葉市六通貝塚－　（財）千葉県教育振興財団

山田貴久　2008『千葉東南部ニュータウン38』－千葉市新明社裏遺跡－　（財）千葉県教育振興財団

古内　茂　2008「東国石庖丁考－石庖丁の普及と稲作の北上－」『物質文化』85　物質文化研究会